

とにし

日蓮大聖人御真筆写

発行所

日蓮正宗法華講妙縁寺支部
〒130-0001
東京都墨田区吾妻橋 2-2-10
TEL 03(3622)5086
FAX 03(3829)2766

第368号

光久御住職御書講義

土籠御書

日蓮は明日(あす)佐渡國(さど)のくに(へまか)籠(こ)るなり。今夜(こゝろ)のさむ(寒)きに付けても、ろう(牢)のうちのありさま、思ひやられていた(痛)はしくこそ候へ。あはれ殿は、法華經一部を色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母・六親・一切衆生をもたす(助)け給ふべき御身なり。法華經を余人のよ(読)み候は、口ばかりことば(言)ばかりはよ(読)めども心はよ(読)まず、心はよ(読)めども身によ(読)まず、色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ。「天の諸(もろもろ)の童子、以て給使(きゆうじ)を為さん、刀杖も加へず、毒も書する」と能はじ」と説かれて候へば、別の事はあるべからず。籠(ろう)をばし出でさせ給ひ候は、と(疾)くと(疾)くきたり給へ。見たてまつり、見えたてまつらん。恐々謹言。

(御書 四八三頁)

《通釈》

日蓮は明日、佐渡の国へ出発する事となりました。今夜の寒さにつけても、囚(とら)われの身として土牢の中にあなた方が思ひやられて心が痛みます。あつばれな事に、あなたは法華經一部を身にも心にも読まれたのですから、その功德によって父母はもろろの事、兄弟をばしめ六親および一切の人々までを救いきる行者といえます。世間にも法華經を読む人は大勢おりますが、ほとんどの人は口先ばかり、言葉ばかりで、心で読む人はなく、たまたま心で読んだとしても実践が伴いません。その点、あなたが身心ともに法華經を読まれた事はまことに貴(とうと)いものです。法華經には、「この經を読む者は天の諸々の童子が侍者となるであろう。それゆえ、法敵は刀杖(とうじょう)を加える事もできず、また毒されても害する事ができない」と説かれておりますので、たとえこの先、どのような事が起きても仏天の加護を信じて、この苦難を乗り越えなさい。やがて赦免となるでしょう。牢から出たら、真っ先に佐渡へおいでなさい。貴重な体験を積んで立派に成長したお姿を拝見したいものと、今から心待ちにしておりますよ。

解説

本抄は文永八(一二七二)年十月九日、日蓮大聖人様が五十歳の御時、相模国依智の本間邸から鎌倉の宿屋左衛門入道邸にあつたとされる土牢中の、弟子・日朗に与えられた御消息であります。

竜口の法難の後、幕府の命により佐渡島へ流される事になった大聖人様ですが、佐渡へ配流される事は、当時の認識で生きて帰れない事を意味していました。「此経難持」を肝に銘じ、師子王の子たらんと懸命に願う日朗でありましたが、佐渡配流を聞き、大聖人様の明日はいかに、また己自身にはいかなる試練が待ち受けているのであろうかと、二十七歳の日朗には、恐らく一抹の不安が去来した日々であつたと思われま。

このような苛酷な状況のなかに、思ひもかけぬ師匠からの一書、しかも出発前の限られたお時間のなかで寸暇を割いてしたためられた温かい激励の数々。さらに常に弟子を思う大聖人の大慈大悲に浴した日朗の感激はいかばかりであつたでしょうか。

短い御文であります。私たちの信行の在り方について御教示された貴重な御書であります。竜口の法難により、数多くの弟子たちが退転していった事を『佐渡御書』では「日蓮を信するやうなりし者どもが、日蓮がか(斯)くな

れば疑ひをを(起)こして法華經をす(捨)つるのみならず、かへりて日蓮を教訓して我賢(かしこ)しと思はん僻人(びやくにん)等」(御書五八三頁)とあります。人の真価は、いざという時に表れるものですが、厳しい弾圧の風のなかで多くの弟子たちが退転してきました。そればかりか、大聖人様を批判し、自分の価値観を物差しにして自己の考えが正しいと我見に陥る人さえ現れたのです。

これらの人々は法華經を口ばかり読み、心で読まず、あるいは心で読んでも身で読む事はなかつたのです。読むという事は、単に口先で「読む」のではなく、「色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ」と仰せられるように、正法に基づく身口意三業が相応して如説修行に実践行動する事でありま。

つまり、総本山大石寺にまします本門戒壇の大御本尊様を固く信じ奉り、唯授一人の御法主人人現下様の御指南を拝して折伏を実践する事でありま。

折伏を実践すれば、三障四魔が競い起こるのは必然です。ただ難に耐えるのではなく、慈悲の心で難に耐える事が肝要なのであります。その慈悲が諸天善神を動かし、どのような事態があつても必ず諸天に護られます。そして難を乗り越え、誓願目標が達成されれば、えも言われぬ素晴らしい境涯へと切り開く事ができるのであります。

(文責・編集部)